

陽明文庫蔵『御哥』について

四九〇

川崎 佐知子

一、はじめに

陽明文庫蔵『御哥』（資料番号〔G940〕）は、近衛家第二十代基熙（二六四八―一七三二）の和歌を集めたものと思われる。近衛基熙は、第一―三代東山天皇（二六七五―一七〇九）の在位期間（一六八七―一七〇九）内の元禄三年（二六九〇）正月十三日より同十六年正月十四日に関白を務めた。宝永六年（二七〇九）十月二十五日、六十二歳のとき、江戸時代の公家では初の太政大臣となった。近世公家日記の白眉『基熙公記』の記主である。延宝八年度・宝永三年度・宝永七年度と生涯に三度も江戸へ下向し、公家であつて幕政に影響を与えた人物でもある。和歌に関しては、烏丸光雄（一六四七―一六九〇）の言説を岡西惟中（二六三九―一七二一）が記録した『光雄卿口授』につきのようにあり、同時代の堂上歌人にも意識されていたと窺い知れる。

一、近衛左大臣基熙公の御歌の御風格別の由申し上げければ、諸公家と風體かはれり、当流にあらず。往々に不可然歌もありける御沙汰なり。当春の御歌に、禁中門松をよみ給ひし。門松は禁中にも仙洞にもなき事なり。大路の門松は民家の事なりと宣ひし。又柳似煙といふ題にて、

水のうへのけぶりは流れ行く末に残るや柳めも春の色

とよみ給ひしなり。行く末には残るまじきなりとていかゞと宣ひし

に、行くあとに申すべきやとつぶやきけるに、跡にと申すにて柳の詮聞え待ると被仰しなり。
（『光雄卿口授』）

しかしながら、近衛基熙の和歌そのものへの検討はあまりなされておらず、歌壇史における位置づけも不十分である。こうした問題意識から、稿者は、陽明文庫に蔵される「基熙公御詠草」の整理を進めている。「基熙公御詠草」とは、近衛基熙自筆の詠草のほか、消息・家集・文書などを含む約二千点を指す。これらを整理するにあたり、詠草を集めた家集ないし家集稿を優先し、資料群に含まれる和歌全体を捉えるよう努めている。陽明文庫蔵『応円満院殿御詠歌』を取り上げた川崎佐知子『『応円満院殿御詠歌』について』（口頭発表 二〇一八年度和歌文学会五月例会 於中央大学多摩キャンパス 二〇一八年五月十九日）、および、陽明文庫蔵『応円満院御詠』を扱った川崎佐知子『『応円満院御詠』について』（口頭発表、和歌文学会関西十二月例会〔第一二八回〕 於大阪大学豊中キャンパス 二〇一八年十二月一日）は、成果の一部である。

本稿では、「基熙公御詠草」に含まれる家集である『御哥』を検討し、その資料的価値を考察する。

二、『御哥』の書誌および構成

『御哥』は、仮綴冊子本一冊。寸法は、竪二〇・五糎、横一四・〇糎。表

紙は本文共紙。表紙中央に、打付書の外題「御哥」がある。本文料紙は楮紙。本文は毎半葉八行書き。和歌は一首を二行書き。詞書は和歌より二字下げ。墨付丁数は二〇丁。遊紙は、巻末に七〇丁。和歌八十五首を収載。江戸中期写。

『御哥』には、比較的長い詞書が備わる。なかには、詠作の年次が記される場合もある。まずは、詞書における詠作年次に注目する。

三月十三日はまの御殿へ御わたりあるへきとの日雨ふり御ゑんゐんになるへきよしひめきみさまへよんてまいらせらるゝ、
はれてよき水の光を又みんとおもへはけふの雨もうれしき

〔御哥〕3^③

詞書のはじめに「三月十三日」と日付が示される。「はまの御殿（濱御殿）」は、現在の東京都中央区、隅田川河口にある浜離宮恩賜公園にあたる。もと甲府濱御殿で、甲府宰相徳川綱重（一六四四—一六七八）より徳川綱豊（宝永元年家宣と改名、同六年六月に六代將軍就任、一六六二—一七二二）が継承した。宝永元年、綱豊が五代將軍徳川綱吉継嗣に定まったのに伴い、宝永四年、將軍家別業の濱御殿として大修築された。「ひめきみさま（姫君さま）」は、家宣夫人の近衛熙子（一六六六—一七四一、近衛基熙女）である。予定されていた濱御殿への「御わたり」が雨のため延引となつてしまったのに関わり、右の和歌が詠まれた。詞書から、近衛基熙の江戸滞在中と見当がつく。たしかに、『統史愚抄』宝永三年二月十八日条に下記のようにある。

十八日丁未。近衛前関白^{基熙} 下向関東。

自関東所招諸也。四月九日上洛。

〔統史愚抄〕^④ 宝永三年二月十八日条

近衛基熙の二度目の江戸下向は、宝永三年二月十八日より同年四月九日までである。『御哥』3番歌は、宝永三年三月十三日の詠作と考えられる。

つぎは、『御哥』35番歌である。

ほうゑい四ねん霜月廿七日左大しん家ひろ公くわん白せん下の
御よろこひの心を

春日山むかしにはちぬかけそへてあふくもうれしけふのことふき

〔御哥〕35

詞書に「ほうゑい四ねん霜月廿七日（宝永四年霜月廿七日）」とある。「左大しん家ひろ公（左大臣家熙公）」は、近衛家第二十一代家熙（一六六七—一七三六）である。その「くわん白せん下（関白宣下）」は、宝永四年十一月二十四日で、即日奏慶もなされた。

関白^{基熙} 前左大臣。辞職。^{奉行蔵人石左大臣家熙。中弁益光} 有関白氏長者牛車兵仗等宣下。上

卿新源大納言^{通躬} 奉行蔵人頭右中将隆典朝臣。此日。関白^{家熙} 奏慶。

属従公卿徳大寺大納言公名已下十九人。殿上人隆典朝臣加之前攝殿上。人修理権大夫兼仍朝臣已下三十八人。或作十一人。侍従資堯為人敷。

〔統史愚抄〕宝永四年十一月二十四日条
『御哥』71・72番歌の詞書には、「ほうゑい七年正月十日（宝永七年正月十日）」とある。

ほうゑい七年正月十日ひかし山の院御さうそうの夜

くるま引よるのかよひち心あれなあすたに君の跡としたわん
花をたにまつとしもせぬ此春にいかて立そふかすみなるらん

〔御哥〕71・72

両首は、「ひかし山の院御さうそうの夜（東山院葬送の夜）」の詠である。故院（東山院）遺詔奏。上卿中宮大夫。^{経音} 使左中将基雄朝臣。此次被行警固々関。上卿同前。已上奉行蔵人頭左中弁尚長朝臣。伝奏松木前大納言。^{宗顕} 戌刻。院着御錫紵。依故院御事也。可為三箇日者。奉行院司右中将実岑朝臣。同刻。奉葬故院于泉涌寺。公卿右大臣^{綱平}。已下廿四人。^{或作廿二人} 殿上人尚長朝臣已下廿二人供奉。侍従資堯為人数。葬場使右中将公尹朝臣。山頭使蔵人中務丞源仲学。導師春瑞長老歟。

奉行後院司歎藏人右少弁光荣。伝奏日野中納言。輝光。

〔統史愚抄〕宝永七年正月十日条

『統史愚抄』宝永七年正月十日条に、「故院（東山院）」が、泉涌寺に葬られた記事がある。

『御哥』77番歌は、つぎのとおりである。

三月廿五日くわんとうへ御下向の御いとまこひに御参内有ける。御ぜんにて御つえゆるさせ給ふ、則御つへ御はいれうその時に
おいの坂つけと給わる此つえの千世万代はきみにさ、けん

〔御哥』77

「くわんとう（関東）」へ下向の「御いとまこひ（御暇乞）」の参内に際し、「御ぜんにて御つえ（御前にて御杖）」を許されたため、近衛基熙が「御つへ御はいれう（御杖御拝領）」を謝した詠である。

近衛前関白基熙六十三歳。参入。近日可下向関東。召御前賜杖。

〔統史愚抄〕宝永七年三月二十五日条

『統史愚抄』宝永七年三月二十五日条に、当時六十三歳の近衛基熙が、第一一四代中御門天皇（一七〇一―一七三七）より杖を賜ったことがみえる。近衛基熙は、同年三月三十日に下向（『統史愚抄』宝永七年三月三十日条）前関白基熙。下向関東。行経尽花美者、当持。軍家宣代初度云々。。三度目の滞在は、將軍徳川家宣と

御台所熙子のもと、三年におよび、上洛は正徳二年（一七二二）四月二十四日である（『統史愚抄』正徳二年四月二十四日条）近衛前関白基熙。自関東上洛。在曆三。

『御哥』には、詠作の状況を窺わせる詳細な詞書が備わる。配列は年代順であり、宝永三年度の江戸下向時から宝永七年度の江戸下向時まで（近衛基熙五十九歳から六十三歳まで）が収載される。

三、他撰の可能性

『御哥』の収載歌は、近衛基熙の詠作なのだろうか。これを確認するため、陽明文庫蔵『応円満院殿御詠歌』（資料番号〈7699〉〈76100〉）と対照する。『応円満院殿御詠歌』は、近衛家第二十五代基前（一七八三―一八二〇）が編纂した近衛基熙家集である。同本には、文化五年（二八〇八）五月十六日付けの奥書がある。全二冊で、第一冊四季、第二冊恋雑の類題和歌集である。二〇〇二首を収載する。現存するかぎりでは最も多く近衛基熙の和歌を集めるため、近衛基熙の和歌かどうかの判定に有効である。『御哥』と『応円満院殿御詠歌』との対応は、つぎのとおりである。算用数字は『御哥』の歌番号であり、（）内は、対応する『応円満院殿御詠歌』の部立と歌番号である。

1（雑1362／雑1981）・2（雑1982）・3（雑1983）・4（雑1984）・5（雑1985）・6（雑1986）・7（雑1987）・8（雑1988）・9（雑1989）・10（雑1990）・35（雑1957）・36（雑1958）・64（秋813）・65（秋814）・66（秋815）・67（秋816）

『御哥』八十五首のうち十六首が対応する。^⑤ 残念ながら、『応円満院殿御詠歌』では、八十五首のすべてについて、基熙の和歌と確認することはできない。

近衛基熙の日記『基熙公記』とも比較する。『御哥』85番歌を掲げる。

東にわたらせ給ふ吹上の御庭にてはきのさかりはなのめんほく
一首よみたまふへしとありければ

幾秋も又も来てみんはきの咲こ、そみやきのおくはたつねし

〔御哥』85

「東にわたらせ給ふ」という詞書から、『御哥』85番歌は江戸での詠作である。前節に掲げた77番歌よりもあとに位置するため、宝永七年度の

下向中とわかる。「吹上の御庭」(江戸城西丸西側の庭園、現在の東京都千代田区にある吹上御苑)の萩の花を詠む。秋ではあるが、正確な日付はない。「一首よみたまふへし」と促された事情もよくわからない。相応する記事を、『基熙公記』宝永七年八月二十六日条に見い出す。

暫之、行向吹上庭、御台(近衛熙子)同道、大樹(徳川家宣)先達令行給、庭景気令悦目、終日遊興、自先日、可被見萩旨、有御約束、今日為其也、誠萩盛、驚目、以御部屋左京、可進一首旨也、非可延引、早速一首進之了、秉燭後、花火アリ、驚目了、戌刻過帰主殿、其後、与御台、言談、及夜半、帰旅館了、

〔基熙公記〕宝永七年八月二十六日条

将軍家宣および御台所熙子とともに、花盛りの萩を愛でた折、その場で一首を求められ、即座に応じたのだという。このときの和歌は、記事とともに綴じ込まれた一片の紙片に書かれている。

萩の枝折て人のたひけれは

折袖のはきの夕はえ色そそふ月と露との光ならねと

幾秋もまたもきてみんはきのさくこ、そ宮城野おくはたつねし

右御台(近衛熙子)自筆也 即読加之了

〔基熙公記〕宝永七年八月二十六日条附属紙

紙片の端より三行は、日記本文とは別筆である。それが熙子筆であることは、最後の一行に明かされる。詞書に続く二首のうち、奥の和歌一首が、『御哥』85番歌と一致する。両首がなぜ熙子筆の紙片で残ったのか、なぜこの一首だけが『御哥』に選ばれたのか、などの事情は不明である。ただ、85番歌が宝永七年八月二十六日に詠じられたことは判明する。

同様に、『御哥』の60番歌は『基熙公記』宝永六年正月一日条に、74番歌は『基熙公記』宝永七年正月二十六日条に、82番歌『基熙公記』宝永

七年七月十一日条に、84番歌は『基熙公記』宝永七年八月十五日条に、それぞれ対応する。

『応円満院殿御詠歌』『基熙公記』との対照を通じ、『御哥』八十五首のうち一部しか確かめられなかったけれども、『御哥』に近衛基熙の詠歌が含まれることは確かである。85番歌は『御哥』の最終番でもある。『御哥』が、宝永三年春から宝永七年八月十五日までの和歌を収めることもはっきりする。

さて、収録歌が近衛基熙の作となると、ひとつ気になることがある。37・38番歌の詞書には、近衛基熙が「太かふ(太閤)」の呼称で著されている。

ほうゑい五二月太かふ北野天神にまふて給ふて

のとけさを神の心とあふくより花野色かをそ、にみつらし

我たのむねかひも天に満ぬらしま事の心神しまもらは

〔御哥〕37・38

近衛基熙は、元禄十六年正月十四日、五十六歳のとき、関白を辞任した。その後、宝永四年十一月二十七日に、男家熙が関白となった。右の詞書で、「ほうゑい五二月(宝永五年二月)」に太閤とされること自体に矛盾はない。むしろ、近衛基熙が、太閤として、敬語とともに詞書に現れることが問題である。詞書の書き手は近衛基熙ではないのではないか。そもそも、外題『御哥』が尊称を伴っていた。『御哥』の編纂者は、近衛基熙とはべつの人物である可能性が高いように思われる。

四、詠草との比較

『御哥』の編纂者は誰なのか。これを考えるため、陽明文庫に蔵される詠草との比較を試みる。『御哥』1—10番歌は、宝永三年度の江戸下向時

の和歌である。関係する詠草は複数種伝わる。

近衛基熙筆「詠草」(資料番号〈60907〉)は、折紙一通。寸法は、縦一九・五糎、横五三・二糎である。端裏書に「関東二而の哥共」とある。内容は、『御哥』1—9番歌に相当する和歌九首である。これとはべつに、近衛基熙筆「詠草」(資料番号〈60908〉)がある。寸法、縦一六・五糎、横五〇・八糎の折紙一通からなる。端裏書に「宝永三三於関東にての哥」とある。内容は、『御哥』10番歌に相当する和歌一首である。二種の資料は、近衛基熙により、上洛後ほどなく、整理されたものである。

いま一種、近衛家久筆「詠草」(資料番号〈60670〉〈60671〉)がある。包紙の上書に「前関白御詠」とある。寸法、縦一六・七糎、横四六・三糎の折紙二通からなる。折紙一枚目の端には、つぎのようにある。

宝永三年武蔵国へ

下向したまひし時

折紙二枚目の奥には、

右御物語にて

あら／＼写し畢

続けて、つぎの和歌一首を書く。

大磯にて

みせはやな名は大いその

とらぬせんいまの尊婦衆は

ねこにたに、す

内容は、和歌十二首である。そのうち端から十首が、『御哥』1—10番歌に相当する。包紙の上書などに、近衛基熙への敬意が見て取れるうえ、大師流の特色ある近衛家第二十二代家久(一六八七—一七三七)の筆跡であることから、近衛家久が、上洛後の近衛基熙の話を聞き取ったものと思われる。

『応円満院殿御詠歌』雑部の1981—1990番歌も、十首がまとまった形で収載されるため、対照資料として加える。以下に、近衛基熙筆「詠草」、近衛家久筆「詠草写」、『御哥』、『応円満院殿御詠歌』の順で記す。『御哥』を基準に、十首の和歌にア—コの符号を付す。近衛基熙筆「詠草」は、二種の資料(資料番号〈60907〉と〈60908〉)を一続きとした。

* 近衛基熙筆「詠草」(資料番号〈60907〉〈60908〉)

富士

基熙

アふりそめし神代思ふも日本の国の光のふしの白雪

イ積りこし世々のことの葉よ、の雪それさへ名さへ高き富士のね

三月十三日濱の御別業をみせ。るへきよしなりしに雨ふりて延

引の沙汰ありつるまゝに姫君へよみてまいらす

ウはれてよき水の光をまたみんと思へはけふの雨もうれしき

十五日西丸より濱御庭の桜十八日まではのりかたからんとて

ことさらに花其外提重など給りけるまゝ、によみて姫君まてまい

らす

エ心さしふかき色香を思ふには花ちるとてもいつかわすれん

十八日風しつかに空よくはれぬ浜の御別業にまかりてみわた

す^三海のおもて遠山の色ことはも中／＼をよはさるに哥よめと

間部越前守す、めければた、うち思ひけることを

オすむ君かめくみをひろみ池水も老をかへせとみきはにやよる

カとふからにわか世へぬへくおもふかな、そよもきかしまとあふきて

庭籠の鶴をみて

キなつかしくよればなつかし都にてみなれつるとはなれもしらしを

これは越前守と物かたりなどするに千年の知音と思はる、まゝに

かくなん

廿三日江戸をたちける名残をおしむまゝに姫君へよみてまいら

ク紫わか草に心そとまるむさしのやみなよくなりてかへる旅路も

箱根山のほり候て雨さへふりてくるしき^ニ遠山におもひかけす
桜のみえければ

ケ岩根ふみくるしき道をいか、せんあはれ遠山桜さかすは

悠

廿二日暮^ニをよひて一品宮牡丹をもちて来らる此花は旧院御寵

愛の花なるよしをきけは昔の事おもひ出られてそゝろに涙も
と、まらずしはしものかたりなどするうち思ひつ、けつれとあ
すは京へかへるへきとて人多くたちこみてさはかしさにいひも
出す彼宮起座の後戌刻になりぬれと文などかきて此哥ををくり
ぬ

コみれは先袖をそしほる我なみたそめしそのよの花かあらぬか

返しなどに詩を、くられけれどあまりのさはかしさにかきも
つけす

*近衛家久筆「詠草写」(資料番号〈60670〉〈60671〉)

基盤公御詠
宝永三年武蔵国へ下向したまひし時

アふりそめし神代思ふも日本のくにの光の富士のしらゆき

イツもりこし世々のことの葉世々つゞ雪それさへ名さへたかきふしの根

参月十三日はまのやしきへならせられ候はんよしにて有ける朝

雨降りければ

ウはれてよき水の光を又みんとおもへはけふのあめも嬉しき

同所の桜を家宣卿よりをくられしよし^時

工心さしふかきいろ色香を思ふには花ちるとてもいつかわすれん

同所にて

オすむ君の恵をひろみ池波も老をかへせとみきはにやよる
力とふからに我世経ぬへく思ふかなこ、そ蓬か嶋とあふきて

同所の庭に鶴の候けるを御覧して

キなつかしくよればなつかし都にてみなれなるとはなれもしらしを

御上京の時姫君御方へ

ク紫に心そとまるむさしのやみなよくなりて帰る旅路^旅を

日光門主より

後西院の御前ありしほとんの花を、くられしよし

コみれは先そてをそしほる我涙ありしそめしそのよの花かあらぬか

御下向の時はこねにて

ケいはねふみくるしき道をいか、せんあはれ遠山桜さかすは

御上京の時同所にて

ふりくれしきのふの雨のはこね山あくれば今朝のふしの白ゆき

*『御哥』1—10番歌

アふりそめし神代おもふも日の本のくにの光のふしのしら雪

イツもりこし世々のことの葉世々の雪それさへ名さへ高きふしのね

三月十三日はまの御殿へ御わたりあるへきとの日雨ふり御ゑん

ゑんになるへきよしひめきみさまへよんでまいらせらる、

ウはれてよき水の光を又みんとおもへはけふの雨もうれしき

十五日西之丸よりはまの御庭の桜十八日までは残かたからんと

てことさらに花その外さけ重なとまいらせられ候るま、よみて

姫君へまいらせらる、

工心さしふかき色かをおもふには花ちるとてもいつかわすれん

十八日風しつかにそらよくはれぬはまの庭にまかりてみわた

す^ニ海のおもて遠山の色ことはもなかなかおよはさる^ニ哥よめ

とゑちせんの守す、めければた、打おもひけること葉を
 才すむ君かめくみをひろみ池水も老をかへせとみきわにやよす
 力とふからに我世へぬへくおもふかなこ、そよもきかしまとあふきて

庭籠ヲ鶴ヲみて

きなつかしくよればなつかし都ニてみなれつるとはなれもしらしを

これはゑちせんの守と物語するに千年のちきりとおもはる、
 ま、に

廿三日江戸をたちける名こりをしむま、によみてひめきみへま
 いらせらる、

クわか草に心そとまるむさし野やみなよく成てかへるたひ路も

はこね山のほるとて雨さへふりてくるしきに遠山におもひかけ
 すさくらのみえければ

ケいわねふみくるしき道をいか、せんあはれ遠山さくらさかすは

コみれはまつそてをそしほる我なみたそめしその世の花かあらぬか

*『応円満院殿御詠歌』雑部1981—1990

宝永三年三月関東にて御詠

富士

アふりそめし神代おもふも日本の国のひかりのふしのしら雪

イ積りこし世々のことのはよ、の雪それさへ名さへ高き不二の根

三月十三日濱の御庭をみせらるへきよしありしに雨ふりて延引

のさたありつるま、に姫君へよみてまいらす

ウはれてよき水のひかりをまたみんと思へはけふの雨もうれしき

十五日西丸より濱御庭の桜十八日まではのこりかたからんとて

ことさらに花其外提重なと給りけるま、によみて姫君までまい
 らす

工心さしふかき色香を思ふには花ちるとてもいつかわすれん

十八日風しつかに空よくはれぬ濱の御庭にまかりて

みわたすニ海のおもて遠山の色ことはも中々をよはさるに哥よ
 めと間部越前守す、めければた、うち思ひふける事を

才すむ君かめくみをひろみ池波も老をかへせとみきはにやよる

力とふからにわか世へぬへくおもふ哉こ、そよもきか嶋とあふきて
 庭籠の鶴を見て

きなつかしくよればなつかし都ニてみなれつるとはなれもしらしを
 これは越前守と物かたりなとするに千年の知音と思はる、
 ま、にかくなん

廿三日江戸をたちける名残をおしむマまに姫君へよみてまいらす

クわか草にこ、ろそとまるむさしのやみなよくなりてかへる旅路も
 箱根山のほるとて雨さへ降てくるしきニ遠山におもひかけす桜
 のみえければ

ケ岩根ふみくるしき道をいか、せむあはれ遠山さくらさかすは

廿二日暮をよひて一品宮牡丹をもちて来らる此花は旧院御籠

愛の花なるよしをきけは昔の事おもひ出られてそ、ろに涙も

と、まらすしはしものかたりなとするうち思ひつ、けつれとあ
 すは京へかへるへきとて人多くたちこみ見てさはかしさにいひも
 出す彼宮起座の後戌刻になりぬれと文にてかきて此哥ををくり
 ぬ

コみれはまつ袖をそしほる我なみたそめしそのよの花かあらぬか

それぞれ和歌の配列に注目する。『御哥』のA→I→U→E→O→カ
 ↓キ→ク→ケ→コに対し、近衛基熙筆「詠草」は、A→I→U→E→O
 ↓カ↓キ→ク→ケと、別資料の「コ」からなる。いっぽう、近衛家久筆「詠

草」は、A→I→U→E→O→カ↓キ→ク→ケと、別資料の「コ」からなる。いっぽう、近衛家久筆「詠

草写」は、ア→イ→ウ→エ→オ→カ→キ→ク→コ→ケの順である。なぜ、配列に違いが生じたのだろうか。

クは、近衛基熙筆「詠草」の詞書「廿三日江戸をたちける名残をおしむまゝに姫君へよみてまいらせつ」によると、宝永三年三月二十三日、江戸から京へ向けて出立する際、姫君に宛て詠んだ和歌である。これに続くケは、詞書が「箱根山のほり候て雨さへふりてくるしき」遠山におもひかけす桜のみえければ」で、出立した後である。これらに対し、コは、詞書に、「一品宮」が「旧院」寵愛の牡丹を携え訪れた旨を記す。「旧院」は、貞享二年（一六八五）二月に崩御した第一一一代後西院（一六三七―一六八五）である。「一品宮」は、日光山輪王寺門跡公弁親王（一六六九―一七一六）で、後西院を父とする。コの日付「廿二日」は、宝永三年三月二十二日で江戸出立の前日である。その日付をめぐる扱いが、配列の差異に現れているのではないだろうか。近衛基熙筆「詠草」において、コが別資料とされるのには、一連の江戸下向に関する出来事とは区別する意識が存するためだろうか。あるいは、後西院を懐古する近衛基熙の特別な思い入れも関係するのかもしれない。近衛家久筆「詠草写」は、近衛家久が、近衛基熙から聞いた話を、日付の順に並べたのであろう。「応円満院殿御詠歌」は、近衛基熙「詠草」に基づき、ア→イ→ウ→エ→オ→カ→キ→ク→ケ→コとしたが、のちに、日付の順に従い、補入記号により、コ→ク→ケと並べ替えたか。『御哥』は、近衛基熙筆「詠草」に従い、資料ごとに並べているように思われる。

和歌の本文については、クに若干の異同がある。クは、宝永三年三月二十三日、江戸出立の折、姫君（熙子）へ宛てた和歌である。

紫に心そとまるむさしのやみなよくなりてかへる旅路（わか草）

（近衛基熙筆「詠草」）

紫に心そとまるむさしのやみなよくなりて帰る旅路（わか草）

陽明文庫蔵「御哥」について

わか草に心そとまるむさし野やみなよく成てかへるたひ路も（近衛家久筆「詠草写」）

わか草にこゝろそとまるむさしのやみなよくなりてかへる旅路も（御哥）

傍線を付した初句に、いずれも「むさしの（武蔵野）」に縁のある「紫」か「わか草（若草）」か、の違いが認められる。近衛基熙筆「詠草」は、「紫」を見せ消し、「わか草」に改める。その改める前の形を、近衛家久筆「詠草写」は残している。「応円満院殿御詠歌」、および『御哥』は、改めたのちの形を採用する。

四種の資料において、配列や和歌に、さほど大きな違いはないようである。いっぽうで、詞書には、それぞれの特徴が際立つように思う。同じくクの詞書を掲げる。

廿三日江戸をたちける名残をおしむまゝに姫君へよみてまいらせつ（近衛基熙筆「詠草」）

御上京の時姫君御方へ

（近衛家久筆「詠草写」）

廿三日江戸をたちける名こりをしむまゝによみてひめきみへまいらせらる、（御哥）

廿三日江戸をたちける名残をおしむまゝに姫君へよみてまいらせつ（応円満院殿御詠歌）

（近衛家久筆「詠草写」）

近衛家久筆「詠草写」はほかと異なるが、内容に大差はない。「御上京の時姫君の御方へ」は、「いつ」「誰に宛てて」という要領を押さえた簡素な表現で、近衛基熙の談話を当座に聞き取ったという成り立ちを反映しているように思う。残る三者に関しては、傍線を付した文末表現にわ

ずかな違いを認め得る。近衛基熙筆「詠草」の傍線部「まいらせつ」は、謙讓語「まいらす」で書き手の近衛基熙から熙子への敬意を表し、完了の助動詞「つ」で、その行為を少し念押しする。『応円満院殿御詠歌』の傍線部「まいらす」は、助動詞「つ」こそないが、熙子への敬意は存する。対して、『御哥』の傍線部は、「まいらせらるゝ」である^⑥。「まいらす」に尊敬の助動詞「らる」が加わるところに、書き手より近衛基熙への敬意までもが認められる。

工の詞書は、濱御殿の御渡りが延引になったことで西丸（家宣）から心遣いが示され、それに対する返歌を、姫君（熙子）へ送った、とするものである。該当部分の近衛基熙筆「詠草」と『御哥』を掲げる。

十五日西丸より濱御庭の桜十八日まではのこりかたからんとてことさらに花其外提重なと給りけるまゝに姫君までまいらす

（近衛基熙筆「詠草」）

十五日西之丸よりはまの御庭の桜十八日までは残かたからんとてことさらに花その外さけ重なとまいらせられ候るまゝよみて姫君へまいらせらるゝ、

（『御哥』）

近衛基熙筆「詠草」では、傍線部の「給り（ける）」「まいらす」に、書き手の近衛基熙から家宣・熙子への敬意が示される。これに対し、『御哥』は、傍線を付した「まいらせられ候る」「まいらせらるゝ」である。書き手の敬意は、近衛基熙にも向けられている。近衛基熙への敬意は、『御哥』の特徴で、ほぼ一貫して認められる。前節に、『御哥』が他撰である可能性に触れた。この敬語の使い方をもって、ほぼ確定してよいのではないか。それだけではなく、書き手（編者）をある程度限定する手がかりともなり得るのではないだろうか。

五、編者の推定

じつは、『御哥』の詞書にある「まいらせ候」「まいらせられ候」は、上層階級の女性が多く用いる語である。

ないくけふはいはくらへ御幸さたまりしに雨ゆへ御えんいん也、
法わう（後水尾院）御庭の花さかりにて、新院（後西院）御幸なしまいら
せられ候、御はな見也、我身（品宮）もめしに給はり、まいる、右府
（近衛基熙）もおなし、

（『无上法院殿御日記』寛文十二年（一六七二）三月十六日条）

近衛基熙室である後水尾院品宮常子内親王の日記『无上法院殿御日記』でも、「まいらせられ候」は多用される。右には、後水尾院の岩倉御幸が雨で中止になったため、急遽、後水尾院の御庭へ、後西院が「御幸なしまいらせられ候」とある。傍線部のうちの「まいらせられ候」には、書き手の品宮から、後水尾院（「まいらせ」と後西院（「られ」）の両方への敬意が認められる。強調しておきたいのは、この言い回しが女性に多いことである。

表現上の特色から、『御哥』の編者は、女性といえるのではないだろうか。『御哥』には、ほかにもそれと思われる例がある。

あかつきの月くもをいとふ

くもる間もうちわひなからみし月の明方ちかくもなかくしそ
恨すやすむへき月をあやにくにしゐてもかゝる山かつらかな

月なゝめにして天未明

秋なれやまとよりにしにみる月もまた明やらのこる夜の空
あかすのみこれはこそあれ月はなをかたふきなからのこす秋の夜

（『御哥』64・65・66・67）

『御哥』64・65、66・67番歌の詞書は、いずれも漢字仮名まじりであ

る。この四首には、近衛基熙筆の詠草が残る。

〔端裏書〕「宝永六八十二内会」

悠見

暁月厭雲

くもるまもうちわひなから

みし月の明方ちかし

雲なかくしそ

うらみすやそむへき月を

あやにくにしるてもかゝる

山かつらかもな

〔基熙公御詠草〕〔資料番号〈60867〉〕一通

〔端裏書〕「宝永六八十二内会」

悠見

月斜天未明

へ秋なれや窓より西に

みる月もまた明やらて

残るよの空

あかすのみみれはこそあれ

月は猶かたふきながら

残す秋の夜

〔基熙公御詠草〕〔資料番号〈60866〉〕一通

どちらの端裏書にも、「宝永六八十二内会（宝永六年八月十二日内会）」と明記される。近衛家で行われた内会である。題を見ると、詠草では漢字であったものが、『御哥』では仮名まじりに改められたとわかる。これも、『御哥』の編者が女性であるためではないだろうか。同日の『基熙公記』に記事を掲げる。

招左幕〔近衛家久〕、有詩哥、余〔近衛基熙〕、家久卿、丹波頼庸〔錦小路頼庸〕、和哥、泰通〔進藤泰通〕詩、為見月也、又、左大将〔近衛家久〕源氏校合、及亥刻了、

〔基熙公記〕宝永六年（一七〇九）八月十二日条

宝永六年八月十二日内会は、詩歌会であった。近衛基熙・近衛家久・丹波頼庸が和歌、近衛家諸大夫の進藤泰通が詩を詠じた。ただ、このなかに女性は見当たらない。

では、編者は誰であろうか。これまでの検討から、女性らしいとはあたりをつけた。それも、近衛基熙の詠草を見ることが許されるような人物、近衛基熙に親しく、かつ相当に重い立場という条件がつく。今一度、『御哥』を見渡すと、ある人物に行きあたる。

三月上しゆんやくし山〔葉師山〕にならせましくてしくう〔侍従御

方〕御とも一やうあん〔二様庵〕のほとりにある者のやしきありゆきてみるに花のさかり夕はへの気色おもしろかりければならせもやあらんとす、め申ければ

たつねてはなかくくそかしすむ人の心のおくそみにしれられおく

し、う〔侍従御方〕すみれつつみて奉しに

この野辺のひはりの床のあれまくをおもはてたれかすみれつみけんさほひめのた、一筆のすさみかも春の、つくしつむもみしかき

〔御哥〕40・41・42

「やくし山〔葉師山〕」「一やうあん〔二様庵〕」は黄檗宗の尼寺である。

現在の京都市北区大宮葉師山東町にある一様院にあたる。三月上旬、近衛基熙が彼地へ出向いた折、傍線を付した「し、う〔侍従御方〕」が付き従い、近衛基熙からの和歌を受けている。

侍従御方は、もともと品宮常子内親王の上臈であった。

入夜、無上方院〔无上法院、品宮常子内親王〕上臈〔侍従、源重相〔久我通誠〕ノメイ也、自今日、前源重相兄〔久我通也〕有故院〕

召置余方、又オイマトイフ上臈アリ、是綾小路三位（綾小路有胤）妹也、自今日、令祇候大納言（近衛家久）方、兩人共、幼少ヨリ無上方院被養育、又上兩人外祇候女房等五六人皆余、右府（近衛家熙）、孫姫君（近衛家熙女）等へ召置了、当時家産不如意、漸召置者也、各召前、給口祝、懷旧々々、又祇候侍政仲同召置之了、

寒山詩

老翁要娶少婦 髮白婦不耐 老婆嫁少夫 面黃夫不愛 老翁娶老婆
一々無棄背 少婦嫁少夫 兩々相憐態 阿呵々々

〔基熙公記〕元祿十五年（一七〇二）九月二十一日条

元祿十五年八月、品宮常子内親王が薨去した。幼少時より品宮の手元で養育された上臈、側に仕えた女房など遺された者たちは、基熙・家熙・家久など、あらたな主人へと振り分けられた。侍従御方は、この日以来、近衛基熙に仕えることとなった。右の割注部分に、源垂相、久我通誠（二六六〇—一七一九）の姪で、前源垂相であるその兄久我通名（二六四七—一七二三、寛文十三年四月十七日出家し静算）女という出自が明かされる。のちには、近衛基熙との間に女子を設けた。

入夜（戌刻）、上臈（侍従御方）誕生女子、各安穩之由有案内、喜悦々々、

〔基熙公記〕宝永三年（一七〇六）正月五日条

女子は、八十君（のち八百君に改名、一七〇六—一七二七）と称され、長じて閑院宮直仁親王（一七〇四—一七五二）室となった。

正徳二年には、侍従御方は、「按察」へと名をあらためた。

巳半刻、京着、摂政（近衛家熙）、内府（近衛家久）、徳大寺夫婦（徳大寺公全・近衛家熙女）、おつま（近衛家熙上臈）、桜井父子（桜井兼俱・桜井氏敦）、山井三位

〔山井兼仍〕等来会、其外来輩多々、摂政以下隔三年、対面相互、有感涙、良久、令対談、且東武之躰客事等少々談之、午後、各退散、後愛八十君成長、喜悦々々、侍従（侍従御方）事可被改名旨、於江府、御

台（徳川家宣御台所、近衛熙子）、兼而有其沙汰、然而、今日從御台、文到来、可被改名旨、摂政（江文有之）、仍自今日、按察トイフ也、此事、御台有惠存歎、懇之事也、終日令語江府事者也、人多来而已、

〔基熙公記〕正徳二年四月二十四日条

宝永七年からの江戸下向を終え、近衛基熙が上洛した日の記事である。傍線部に、侍従の改名が、熙子より言い出されている。

享保七年（一七三二）九月十四日に近衛基熙が薨去した後は落飾し、芳林院と号した。その後も、近衛基熙晩年の居所である堀河御殿に住まいし続けた。享保十八年二月には、近衛家久の男で、第二十三代内前（一七二八—一七八五）同母腹弟の寛君（一七三三—一七三九、早世し号玉麟院）を預かり養育したことが、陽明文庫蔵『雑事日記』に見える。

一、今度御誕生之若君（寛君）、芳林院殿へ御預ケ也、今日、堀河御殿へ御移也、御内々、黄金一枚、御樽一荷、生肴一折被為贈之、堀河男女、御目六、鳥目等被下之、御方料三十石之事、

〔雑事日記〕享保十八年二月十九日条

『雑事日記』寛延元年（一七四八）十二月二十五日条には、逝去と葬送の記事がある。

一、芳林院殿逝去之由、今日露頭、（実去三日也、開東候、堀川兵部大輔義故延引）、応円満院殿下之上臈、（久我家娘、廣體殿）行年七十才也、時節柄（二）よりて、御鎮之日数定かたし、今日一日内々御精進也、

一、芳林院殿、今夜西王寺葬送、令省略畢、

〔雑事日記〕寛延元年十二月二十五日条

行年七十才とあるのに従えば、延宝七年（一六七九）生まれである。陽明文庫蔵『近世歴代御内室名録』の「基熙公室」の項目に、無上法院宮（品宮常子内親王）に並記される。

無上法院宮

後水尾天皇皇女常子内親王（品宮） 寛永十九年三月九日生

寛文四年十一月廿三日御降嫁、元禄十五年八月廿六日薨（六十一才）

芳林院 久我通忠（忠）女

（陽明文庫蔵『近世歴代御内室名録』『基熙公室』一頁）

近衛家において、それなりに重きを置かれた人物と思われる。

にもかかわらず、さきの『御哥』40・41・42番歌では、侍従御方の行為が、敬意とともに著されることはなかった。じつは、侍従御方こそが、詞書の書き手なのではないだろうか。ここに、『御哥』の編者が、基熙の上臈である侍従御方である可能性を指摘する。

六、おわりに

『御哥』には、御会などの晴儀で詠まれた和歌は一切収録されていない。収録歌に重なる詠草を求めても、すでに言及した『御哥』1—10・64—67番歌以外は、近衛家熙関白宣下に関わる35・36番歌にあるのみ（資料番号〈61097〉）で、ごくわずかである。元禄十六年に関白を辞任した後の近衛基熙は、宝永六年（一七〇九）十月二十五日に太政大臣に叙せられるものの、同年十二月九日に辞任した。公職から遠ざかって久しく、公宴などへの出詠の機会も少なくなっている。挨拶や即興の詠が多いことを、『御哥』の家集としての特色と見てよいように思う。

本稿では、近衛基熙に仕えた上臈侍従御方（芳林院）を、編纂者に推した。『御哥』の収録歌は宝永三年から宝永七年で、室品宮常子内親王が薨じた元禄十五年よりもあとの詠ばかりである。室のような立場でなければ、撰闋家当主の手すさびを、容易に手元に揃えられるような人物はごく限られる筈、との想像に依拠した結論である。ただし、侍従御方の改名に、江戸にいる將軍御台所熙子の肝煎りがあった（『基熙公記』正徳二年

四月二十四日条）のと同じく、御声掛かりによる家集編纂も念頭に置くべきだろうか。おそらくは享保七年の近衛基熙薨後、侍従御方が、自身の存在も適度に織り交ぜながら、おもに仮名書きした詞書を付し、書き進めたものだろう。

なお、近衛基熙の詠作活動が、宝永七年で終止したわけではなく、それ以降の和歌も伝わっている。さきに述べたように、『御哥』は墨付二〇丁であるが、巻末には、それを上回る六九丁もの遊紙がある。これは、現存する八十五首よりもさらに先を書き継ぐ意志が確実に存したという紛れもなき証拠なのではないだろうか。

末筆ながら、貴重な資料の調査の許可を下さった公益財団法人陽明文庫に御礼申し上げる。

本稿は、二〇一九年七月六日、相愛大学・南港学舎（大阪市住之江区）で開催された和歌文学会関西七月例会（第三〇回）における口頭発表に基づく。

本研究は、JSPS KAKENHI Grant Number JP17K02435の助成を受けたものである。

注

- ① 宝永七年度江戸下向時の一端を、拙稿「近衛基熙の書物交流」（『和歌文学研究』九六号 二〇〇七年六月）に論じた。
- ② 上野洋三氏『元禄歌壇の基礎構築』（岩波書店 二〇〇三年）など、従来の近世前期和歌史研究では、近衛基熙に言及しない場合が多いように思われる。
- ③ 算用数字は、私に付した『御哥』の歌番号である。以下同様。
- ④ 『統史愚抄』は、『新訂増補国史大系 第十五卷 統史愚抄 後篇』（吉川弘文館 二〇〇〇年 新装版第一刷）による。なお、適宜、〔 〕内に私注を付した。以下同様。

⑤ 番号で掲出した十六首とはべつに、『御哥』76番歌と『応円満院殿御詠歌』春部172番歌とが似通う。ただし、上句までは一致するものの、傍線を付した下句が異なる。

むすひあけてたかそてまてかにほふらん花ちりうかふ梅の下水

〔御哥〕76

結びあけて誰袖まてか句ふらん梅ちりうかふ水の行末

〔『応円満院殿御詠歌』春部・題「梅下水」・172〕

『応円満院殿御詠歌』春部172番歌のもととなった「詠草」(資料番号〈60754〉)の端裏書には、「元禄八二十七日内会兼日(元禄八年二月廿七日内会兼日)」とある。両首は、それぞれ別の折の和歌と判断し、対応歌に数えなかつた。

⑥ 「まいらせらるゝ」は、文末であるが、終止形ではなく連体形である。

連体形終止は、近世前期に見られるとされるうえ、同じ近衛家で、近世前期に書かれた後水尾院品宮常子内親王の日記『无上法院殿御日記』には恒常的に用いられている。『御哥』に用いられることも不自然ではないと思われる。

⑦ 薬師山一様庵の庵主は、後水尾院品宮常子内親王にかつて中臈として仕えた隠巖衍真尼(貞松尼、一六六三—一七三二)である。一様庵建立には、近衛基熙の肩入れがあつた。以上は、『无上法院殿御日記』『基熙公記』『雑事日記』などによる。『黄檗文化人名辞典』(思文閣出版 一九八八年)の「隠巖衍真尼」項も参照した。

(本学文学部教授)